土師時代集落把握への小考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学考古学専攻講座創設二十五周年記念会 公開日: 2017-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18457

土師時代集落把握への小考

小林三郎

一、土師式土器文化の限界

土師式土器が、初期農耕社会の弥生式土器の次に出現する土器群として把えられていることは云うまでもない。そして弥生式土器は、日本古代国家生成期の所産であり、土師式土器が、日本古代国家誕生後、すくなくとも、日本における階級社会成立後の土器としてみることが通念となっていた。

しかしながら、土師式土器がある一定の年代を持ち、それの型式的な変化が何を意味し、標徴的な古墳とどのように結びつくのかを論じたことは、きわめてすくない。ことに土師式土器をもつ集落の分析など、日本の律令前代の社会の底辺を形成する人々の動きを捉えようとする仕事は、なかなかむづかしいことであった。

時間的な尺度としてみた場合の土師式土器の型式的な変化の過程すら、近年にいたるまで、追求されることがすくなかった。実際にわれわれの用いる土師式土器なる概念も、研究者の間で、まちまちであることは否めない事実である。ただ大方の一致するところは、土師式土器が、古墳の作られるような段階から、もしかすると平安時代にいたるまでの土器群をふくめて考えた方がよいのではないかということである。事実、日本各地の国分寺址からしばしば発見される土器群は、従来、われわれのいう国分式土器であり、国分寺造営の年代と、きわめて近い関係のあることが明らかとなっていた。そして、奈良平城宮址の発掘調査の進行にともない、かなり実年代を明らかにしうるような土器群が発見され、従来の見解のある程度の正当性が認められるところとなった。

しかし、実年代を明らかにしうるような資料は、ごく限られた一部のもののみであり、大半は、実年代の明確になし得ない場合が多いのも事実である。そこで、ある一定の年代の幅を示す尺度として、土器群の型式的な分析をまず考慮してみなければならない。勿論、「土器型式」の持つ意味は、広く深い。ことに、階級社会成立以後の土器の持つ意味は、社会規制の中での人々の直接の動態を反映するとは云い切れぬものがあろう。

単に年代の尺度として土器を用うるならば、われわれのいう編年的考察を充分に生かせばよい。いま、われわれは土師式土器の時代を五期あるいは六期にわけて考えようとしている。そして、それの基準は関東地方を中心としておこない、西日本のものを対比させながら、日本全体の年代の尺度をつくろうとしている。特に、西日本ではいわゆる「須恵器」が導入され土師式土器とは若干性格をことにする土器が主流を示すようになる時点から、東日本と西日本とでは、土器そのものの様相を異にするようになるので、一律に関東地方で組み立てた土師式土器の編年基準をもって、それをあてはめる場合に困難を生ずるのである。

関東地方を中心とする土師式土器の編年基準を大体上表のように考えている。この表からみてみると、土師式土器の用いられた年代は西暦四世紀から九世紀にわたるものと考えられ、さらに、その下限は九世紀末から十世紀にかけてまでとも考えられるのである。一般の集落が不明確な奈良・平安時代はわれわれの考えでは、当然、この土師式土器の時代と云わなければならない。これらの考えをもとにして、遺跡における一軒一軒の

土師式土器・文化の編年表

土師時代	800A.D.	晩期Ⅱ	国分式土器（国分期）	平安仏教文化
	700A.D.	晩期Ⅰ	真間式土器（真間期）	奈良仏教文化
	600A.D.	後期	鬼高式土器（鬼高期）	（後半）後期古墳文化（前半）
	500A.D.	中期	和泉式土器（和泉期）	中期古墳文化
	400A.D.	前期	五領式土器（五領期）	（後半）前期古墳文化（前半）
	300A.D.			

杉原・小林「古墳文化」（『市川市史』第一巻）による

竪穴住居址を検討し、竪穴住居址群を最少の単位とする一定のひろがりをもった集落あるいは村落の全体的な把握を試みる必要がある。

考古学的な発掘調査によって得られた遺跡における竪穴住居址群が、そのままの形で集落あるいは村落として把握することはできない。しかし、近接する遺跡間の両者の関係は、竪穴住居址の各々・土器の一個一個、一群の竪穴住居の示す一定の方向や規模によって、同時性、時間差、有機的な連関の有無などを摘出することは可能である。ただし、考古学的調査によって得られる資料は、その遺跡をのこした人々の最終的な姿であり、それに至るまでの過程を一遺跡の中の遺物からだけでは容易に判断できないのである。文書にのこされた戸籍帳などには、村落の戸数は勿論のこと、一家族の構成人員や、家族の異動などが記載されていて、連続する人間の動きを伝えてくれるものがある。考古学的な資料と文書との直接的な関連が何らかの形でつかみとることが可能になるような方法を、考古学研究の立場からも検討してみたい。

二、土師時代集落の規模について

土師時代の遺跡では、住居址が一定の地域内に密集して発見されることが多い。平坦な台地上のせまい場所に、かなりの竪穴住居址が重なりあっているのである。こうした現象は、縄文時代のものでも、弥生時代のものでも同様であるが、土師時代のそれは、大きな特徴として、同一型式の土器をもつ竪穴住居が、場合によっては三軒も四軒も、お互いに切断し合うような格好で存在することである。縄文時代や弥生時代の竪穴住居址群は、お互いに切断し合っていても、明らかに土器型式に差異があって、時間的な前後関係の明らかなものが多い。

われわれの経験した市川市須和田遺跡[1]の場合には、土師時代後期—鬼高期の竪穴住居址が、多い場合には四軒がお互いに切断し合ったような形で発見されている。そして、土器型式の検討の結果、土器にはほとんど時間差のないことが知られた。しかし、竪穴住居址の前後関係は、その造られた時間的な差の存在することを明らかにしている。また、須和田遺跡の住居址群全体をみてみると、竪穴住居址の重複は随所に見られていて、同じく全体が三〜四時期に

分析されるであろうことも推定される。竪穴住居の重複による時間差を考えることも一つの拠りどころであるが、その他に、竪穴住居址内に設けられたカマドの位置や、竪穴の規模、さらには台地上における場所の選定など、基本的に分析する要素は多くあると思われる。これらのことを充分に考慮した上で須和田遺跡の土師時代後期の集落群を分析してみると、大きく分けて三期の竪穴住居址群が漸移的にいとなまれていたと考えられるに至ったのである。そうすると一時期に同時に存在していた竪穴住居址は、およそ二十〜三十軒ぐらいのものとなり、弥生時代の住居址群の規模とそれほど大きな差のなかったことがうかがえたのである。

須和田遺跡とほぼ同じ時期と考えられている八王子市中田遺跡[2]の場合でも、前後三回にわたる発掘調査の結果、やはり土師時代後期には、三時期の竪穴住居址群の重複があり、各時期の竪穴住居址数は二十五〜四十軒ぐらいであったというから、中田遺跡の場合は、須和田遺跡よりもやや規模が大きいものとみてよいであろう。遺跡によって竪穴住居址の数が一定しないのは、やはり自然地形によって左右されるものであろう。しかし、土師時代後期の一つの時期の竪穴住居址群の一つのまとまりが、数十軒を超えるという報告に接したことがまだないから、一定期間にいとなまれた竪穴住居の平均的な戸数は、やはり二十〜四十ぐらいのものではなかったかと推定されるのである。

土師時代の前期では、やはり竪穴住居址群の戸数は明確に把握されていない。われわれがかつて発掘調査した埼玉県東松山市五領遺跡では[3]、総数百戸を超える前期土師式土器を持つ竪穴住居址群があった。五領遺跡では、弥生時代最終末と考えられる前野町期に属する竪穴住居址もあって、弥生時代から土師時代にまたがるものであった。しかし、総数百戸を超える土師時代前期の竪穴住居址群に比して、弥生時代最終末期の竪穴住居址は、数にして二十戸をあまり出ないという少ない数であった。そして、五領遺跡では住居址が切断し合うという現象がほとんどみられず、土器型式としても一つの型式しか存在しないという結果からして、二〜三時期にそれを分析することも困難である。だからといって、他の土師時代前期に属する竪穴住居址群の類例をみてみると、数は決して多くない。先述の市川市須和田遺跡では、十〜二十戸ぐらいであっただろうし、八王子市船田遺跡[4]では十六軒、同中田遺跡では十軒に満たないというものであった。五領遺跡のある東松山市周辺でも、土師時代前期の竪穴住居址が一遺跡で二十軒を超えると

いう例をまだ知らない。従って、五領遺跡の竪穴住居址数はきわめて異常なものなのか、あるいは分析の方法にまだ検討すべき余地を残していて、やはり二時期〜三時期にわたるもので、一時期三十軒ばかりの竪穴住居址群でまとまりが構成されていたのかも知れない。

土師時代中期の遺跡で、竪穴住居が一群となって、一つのまとまりを見せる例はきわめて乏しく、その全体的な比較ができない。しかし、近年調査された船橋市外原遺跡[5]の例をみてみると、十二軒の竪穴住居址があり、遺跡がまだ同地に連続して存在する可能性もあるというから、やはり二十軒ぐらいで一つのまとまりを見せるのではないかと推定されるのである。また、土師時代中期の竪穴住居址群が明確でないことから、前期から後期への過渡期として、何らかの社会的な変化があったのではないかと推察する考え方もある。[6] この時期はまた、丁度、東日本とくに関東地方にはじめて畿内形古墳の出現する時期とも一致しているのである。

土師時代晩期に至ると、須和田遺跡のように、後期の竪穴住居群の密集した地帯では、竪穴住居址の分布が疎になる傾向を示すのである。これと同じ傾向は他の遺跡でも類例をみることができるし、逆に、後期の竪穴住居址群を同一遺跡内に伴なわないところでは、比較的密な分布を示すものと思われる。真間期〜国分期にかけての竪穴住居址は、実際の規模が小さくなったり、竪穴内部にみられた柱穴すら不明な例が多くみられる。須和田遺跡の例をみると、後期の竪穴住居址群の中に、きわめて粗い分布を示し、全体に規模が小さく粗雑な竪穴住居になっている。国分期も同様な状態を示している。竪穴の規模も三メートル前後のものが一般のもので、柱穴も明らかでなく、場合によってはカマドの付設もないようなものすらあった。このことは、住居構造の変化というだけではなくて、住居の内容が基本的にかわったとみるべきであろう。[7] 住居内容とは、家族構成人員の減少、あるいは生活条件の変化、言葉を換えて云えば、人々の労働に関わる条件の変化や、社会的規制の変化を表現しているものとは理解できないであろうか。

三、古墳の変容と集落

前期古墳が、独立的な一人一墳主義の壮大さを誇る性格のものであったのに対し、後期の古墳は小規模で、同一墳丘にいくつもの埋葬主体を持ったり、あるいは同一主体内にいくつもの追葬があったりというものに変容をとげているのである。そして、後期の古墳は群集していとなまれる傾向が強いのである。そこでわれわれは、古墳の築造という土木工事が、どれほどの人力を要し、どれほどの日数を要するかを考え、それを遂行するための労働力のベースを求めなければならない。つまりは、一古墳の被葬者の持っていた「力」の領域を確認しなければならない。云いかえれば、古墳の築造にあたって、いくつの集団（竪穴住居群のいくつかの単位）が直接それにたずさわったかということである。

たとえば応神天皇陵や仁徳天皇陵の築造については、それが国家的事業という名目のもとにおこなわれたであろうことは想像に難くないし、おそらく畿内を中心としてかなり広範囲にわたる地域の労働力を集約したことであろう。こうした場合、応神天皇陵や仁徳天皇陵の古墳の領域を全国的な規模として把えようというわけである。実際各地に見られる中期古墳までの大形古墳は、応神・仁徳天皇陵に及ばぬ規模とは云いながら、かなり大規模な古墳を築造しているから、それらの被葬者の「力」の領域は相当広範囲であったことが推定されるであろう。

しかしながら後期の古墳は、次第に小規模になりつつ数を増すのである。そして一定地域内に群集して存在するような傾向を示しはじめる。そうした段階で、一墳丘内にいくつもの埋葬主体をいとなんだり、一つの埋葬主体中に何度も追葬したりする方法がはじまるのである。家族墓的あるいは家父長的な社会の反映であるという表現がとられているのである。しかし、問題はそれらの古墳が、あるいは古墳の被葬者が、周辺の集落と如何なる関係を持つかということである。

例えば、須和田遺跡を中心にしてその周辺の情況を検討してみると、およそ次のような筋道になると思われる。下総国の西南部では二つの大きな古墳のグループがある。一つは現在の市川市と松戸市とにまたがる国府台古墳群であ

り、[7] いまひとつは我孫子町にある我孫子古墳群[8]である。この両者はお互いにそれぞれの個性（古墳の形態・埋葬主体の種類など）を持っているが、両者の時間的な関係についてみると、全く無関係でないことがわかる。つまり、国府台古墳群の河原塚古墳[9]が最初に、次に我孫子古墳群の水神山古墳・金塚古墳などが築造され、次に国府台古墳群の法皇塚古墳[10]が築造されるという順序になろう。法皇塚古墳の築造を契機として、両古墳群に時間的に併行しながら後続のいくつかの古墳をいとなんだと思われる。おそらくそれは七世紀末葉から八世紀にまで及んだと考えられる。

河原塚古墳・水神山古墳・金塚古墳・法皇塚古墳などは一人一墳の盟主的内容をもつ古墳であるが、他は小規模であったり、一つの墳丘にいくつもの埋葬主体をもつものなどであった。法皇塚古墳の年代を、埋葬主体の型式・副葬品の状況から判断して、西暦六世紀中葉のものとすると、この地域での一人一墳主義的な埋葬方法は六世紀後半で一応の区切りをつけたのだと見られないこともない。後期の土師式土器が盛行していた段階であろう。須和田遺跡の竪穴住居址群はせいぜい二十～三十軒位のものと推定されるから、法皇塚古墳ほどの古墳を、須和田の人々だけで築造することは出来ないし、その程度の人々の上に立つほどの人物ではとうてい古墳に葬られなかったであろう。ここで考えなければならないのは、隣接する我孫子古墳群との関わりである。江戸川以東、印旛、手賀沼以南での明確な古墳群の存在は知られていない。東関東地方では最も古墳群の稀薄な地帯であると云ってよい。我孫子古墳群以東では印旛沼をはさんで竜角寺古墳群があり、それ以東は多くの古墳群の存在が知られている。こうした状況から判断すると、我孫子古墳群と国府台古墳群は、その築造開始当初は両者をふくめて一つの領域であったものが、法皇塚古墳の築造を境にして分離し、それぞれが独立した領域をもつようになり、六世紀後半以後は独自に古墳群を形成するようになったとも考えられる。だからと云って、竪穴住居址群の規模がとりわけて大きくなるわけでもなく、同じような状態を持続していたと思われるのである。問題はむしろ、何故に我孫子古墳群と国府台古墳群とがそれぞれ独自に小規模古墳群を形成するに至ったのかということの原因である。勿論、両古墳群間の中間地帯や周辺の竪穴住居群がすべて把握されない限りこれ以上論を進めるのは危険だと思う。

四、大嶋郷と土師時代の住居群

いままでみてきたように、土師時代の竪穴住居址群は、せいぜい二十〜四十軒ぐらいで一単位をなしていたものと考えられる。ところが養老五年（西暦七二一年）の大嶋郷の戸籍は、里は三里、郷戸数五十戸、房戸百三十戸、人口一一九一人となっていて、房戸には平均九・一人が属していたという。[11] このままの数字を、いままでの考古学的調査によって得られたデーターをもってあてはめてみると、一遺跡の数では規模が小さすぎるのである。一遺跡の竪穴住居址数を平均三十軒としても、大嶋郷の規模は四遺跡分はある計算になる。大嶋郷の実年代からすると、土師時代晩期・真間式土器から国分式土器にかけての時期と考えられるから、竪穴住居址の一グループの数は、須和田遺跡でもみたように、二十軒ぐらいの小規模な単位であったと考えられる。二十軒分の遺跡が六個所以上集合しなければ大嶋郷が成り立たないことになってしまう。

大嶋郷の推定地、葛飾柴又付近の地形から観察すると、湿地帯の中の各所に微高地があって、竪穴住居のいとなめる状況は充分にあると考えられる。しかし、現実には真間式土器を出土するような遺跡の発見例に乏しく、にわかに根拠を明らかにし難いのである。中川を中央にはさんで、江戸川と荒川の二河川の中間地帯にまで範囲を拡大してみると、伊興遺跡[12]などがあって関連づけるに格好な資料となる。伊興遺跡は、土師時代後期鬼高期の遺物を伴ない、同時期の祭祀遺構を中心とする遺跡である。調査者等の報告によれば「四・五世紀から七・八世紀の約三〇〇年間に亘り、大聚落があった事が明らかにされた」というから、土師時代中期から晩期にかけていとなまれた遺跡であると推定される。とすれば、当然、大嶋郷と年代的にも接触を持つ筈であり、その関連性が考慮されよう。一方、柴又地区の南方には上小岩遺跡[13]があり、弥生時代後期中葉から、奈良・平安時代まで継続していとなまれた遺跡であるといわれる。上小岩遺跡は低地遺跡のために、竪穴住居址群は確認できなかったが、土器破片の相当量の発見によって、遺跡の規模は伊興遺跡に匹敵する程のものとも考えられる。こうしてみてくると、大嶋郷推定地付近に、いくつもの住居群が密集していたのではなく、数キロメートルづつ離れて単位住居群が存在していた可能性が強くなる。そして、

その存在範囲もかなり広い地帯におよぶことも充分考えなければならない。小規模な古墳群の存在も伊興遺跡付近にみられるし、一方、柴又にはそれより若干年代の遡ると思われる古墳（円墳・横穴式石室をもつ古墳）のあることからみると、国府台古墳群の小規模古墳群の存在地帯（国府台付近）と松戸市河原塚古墳との関係に近い性質をみることもできよう。

終末期の国府台古墳群の領域は明確にし難いが、我孫子古墳群との関連において考えてみると、現在の市川・松戸・船橋をふくむ直径二〇キロメートル前後の範囲を推定してもよいかも知れない。一方、葛飾地区でも伊興の小規模古墳群と柴又の小円墳・上小岩遺跡などの関連性に立脚すると、江戸川と荒川にはさまれた南北二〇キロメートルほどの範囲の中に、数個所以上の遺跡を擁して大嶋郷が存在しうるのではないだろうか。そしてそれは、後期小規模古墳群の領域を基礎として規模が律せられているように思われる。

大嶋郷では、一戸平均九・一人になるという。しかし、同時期の住居址の規模から推定すると、多くても四人程度が一軒あたりの可住範囲ではないだろうか。一戸九・一人という数字は住居の数ではなくて集落内の最少単位の人数を示しているにすぎないと考えられ、実際の住居は従っていくつに計算すべきか平均値すら割り出せない状況である。土師時代集落の分析がますます必要であり、かつ重要な意味をもっていることを痛感する。行政上の村落構成と、実際にある集落構成との相違をどのように理解していくかが今後の大きな課題となろう。

※本稿では、一遺跡における竪穴住居址群を集落という言葉で表現しなかった。しかし、一遺跡内の住居址に、同時性と関連性があり、一つの群として捉えることが可能となったとき、それは単に住居址の集合という意味ではなく、集落として把握すべきものだと考える。ここで集落と表現しなかったのは、われわれの住居址群の分析にまだ若干の曖昧さを持っているからである。同時に共同体という言葉も用いなかった。

注

(1) 杉原荘介・小林三郎「古墳文化—土師時代」(『市川市史』第一巻) 昭和46年
(2) 八王子市中田遺跡調査会編『八王子市中田遺跡』古墳時代集落址の調査　資料篇Ⅰ　昭和41年
同　資料篇Ⅱ　昭和42年
同　資料篇Ⅲ　昭昭43年
(3) 大塚初重「埼玉県五領遺跡の調査について」(日本考古学協会第21回総会研究発表要旨) 昭和33年
杉原荘介・大塚初重「埼玉県五領遺跡第三次調査について」(日本考古学協会第27回総会研究発表要旨) 昭和36年
杉原荘介・大塚初重・和島誠一・金井塚良一「埼玉県五領遺跡第四次調査について」(日本考古学協会昭和37年度大会研究発表要旨) 昭和37年
金井塚良一他「五領遺跡B区の発掘調査」(「台地研究」13) 昭和38年
(4) 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成』本編1　昭和47年
(5) 八王子市船田遺跡調査会編『船田』東京都八王子市船田遺跡における集落址の調査Ⅰ、昭和44年
(6) 八幡一郎・岡崎文喜・松浦宥一郎他『外原』古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査　昭和47年
(7) 杉原荘介「地方農耕社会の姿相」(『古代の日本』7・関東) 昭和45年
(8) 杉原荘介・小林三郎「古墳文化—土師時代」(前出)
(9) 東京大学考古学研究室編『我孫子古墳群』　昭和44年
(10) 大場磐雄他『松戸河原塚古墳』昭和34年
(11) 杉原荘介・小林三郎「古墳文化—土師時代」(前出)
(12) 宮本救「編成される郷里」(『古代の日本』7・関東) 昭和45年
(13) 『武蔵伊興』(国学院大学考古学研究室報告　第二冊) 昭和37年
大場磐雄・滝口宏・永峯光一「葛西地区における考古学的調査」(東京都文化財調査報告書　23) 昭和45年
熊野正也「上小岩遺跡出土の土器」(杉原・大塚編『土師式土器集成』本編1) 昭和47年